＜第３回会員総会へむけて＞

「協同総合研究」の定着のもとに研究所の本格的確立を

広瀬　謙一（協同総合研究所・事務局長）

協同総合研究所では第３回目の会員総会を来る６月26日（土）に東京の日本青年館にて開催するはこびとなりました。会員の皆さんに、別送した「1992年度事業報告、決算、1993年度事業計画、予算」各議案の検討と、役員改選も行なう本総会へのご出席をお願いするとともに、ここに総会の概要をお伝えいたします。

「協同総合研究」が着実に前進

92年度の研究活動は、「変革の立場に立った協同の思想、理論、政策の総合的研究」＝「協同総合研究」が一段と深まりを見せ、ＩＣＡ東京大会ベーク報告の真髄である、変革の立場、公共と協同の関係、新しい協同組合への注目、協同組合セクター論の諸点にかかわり研究所の位置を示してきたと言えます。

①「人類の危機と協同でひらく未来」をテーマとした昨年の京都での「全国協同集会」の成功。

②ＩＣＡ大会を迎えた記念碑的事業としてのベーク報告の翻訳出版とその普及。

③同報告を討議、追求する基本研究会＝連続シンポジウムの開催と仕事の発見誌での特集。

④黒川理事長の『いまなぜ労働者協同組合なのか』、労協国際シンポジウムの記録『ワーカーズ・コープへの挑戦』の刊行。

実践的な研究活動への波及

これらの基礎研究をもとに、協同運動と事業化のための実践的研究も、この１年で確実な前進を示してきました。

①子育てコープ、高齢者協同組合、ゴミ資源リサイクル、国労闘争団の労協への展望、労協法制論等の追究と実践・事業への提起。

②労協グループの結成による、本格的な生産事業（洗濯機、福祉機器）の開始。

③「ベーク報告翻訳」「ゴミリサイクル政策」「労協教育テキスト（一次案）」「四国森林保全」（以上事業団より）、「米の消費、組合員調査」（いばらきコープより）、「職員研修・協同組合講座」（千葉エルコープより）、および諸団体への講師派遣を受託研究として実現。

実践的課題への積極的な対応によって、「協同の駆込み寺」とも言える研究所の特徴が打ち出され、その結び目として『協同の発見』が機関誌として定着し、昨年総会時点から50以上の新たな会員を迎えることができました。

しかし、これらを支える財政的自立性、全会員の力に依拠した事務局体制という点では、解決されるべき課題が残されていると言えます。

93年度を協同総研の本格的確立の年に

今、〝バブル経済〟が崩壊し、地域づくり仕事おこしの力量が本格的に問われる事態を前にして、協同が時代の焦点に浮上するところとなってきています。研究所も92年度の実績の上に、現代を切り拓く協同総合研究の本格的深化をはかり、政策を蓄積し、協同の担い手を育成し、財政的にも実質的な自立をはかることが問われています。

①会員の参加による協同総合研究のさらなる前進、②実践的研究活動を受託研究に結びつけ、財政的自立を実現する、③機関誌発行体制を再検討し、協同組合型研究所の機関誌のあり方を明確にする、④これらを支える会員の拡大と組織改善、などが本総会の柱となることでしょう。

総会に引き続き開催される、26日（土）～27日（日）の「政策研究交流集会」は93年度研究事業活動の最初の取り組みでもあります。交流集会では、会員の皆さんの英知と実践の成果を持ちより、この１年間の活動のスタートを切ろうではありませんか。